

## 楽しい読みで力をつける

大阪教育サークルはやし 宮本哲

### 「音読で力をつける」

現在六年生の担任をしている。国語、算数、社会、理科など、どの教科でも子どもが教室で、教科書を読む場面がある。その時に感じるのが子どもの音読の力の差である。

ある子は、教科を問わず初見の文章をスラスラ読める、また、ある子は、物語文を声に強弱、抑揚、間などをつけながら、その場面が伝わるように読む。

しかし、一方では、初見の文章を一〇回も二〇回も詰まりながらたどたどしい、ゆっくりとした読みしかできない子もいる。一年生から今まで、学校では同じように学習し、音読の宿題なども同じようにしてきたはずである。

なぜ、こんなにも差が生まれてくるのであるろう。当然、文章をスラスラ読めなければ

ば、学力形成において差が出てくる。中学校に向けてこの差を少しでも縮めていかなければならない。ここで考えられるのは、読みの量の差が考えられる。この差が生まれるのは、学校と家庭のどちらかと考えるならば、どちらかと言えば、家庭である。

音読宿題を考えてみると、ある子は、家の人（聞き手）がしっかりと聞いてくれ、毎回、評価（称賛やアドバイスなど）してもらえる。それが励みになり、自分から何度も読むようになる。そして音読が好きになる。

一方、家の人（聞き手）がおらず、一人で読んでいる子は、だんだん読むのが、面倒になり、読まなくなっていく。

このようなことは、一例であるが、読みの量は学年が進むにつれて開いていく。だから学校で読むことを好きになるような取り組みをし、自主的に音読する気持ちにな

育てていかなければならない。

クラスでできるいくつかの音読の取り組みを紹介する。

### 権利読み

句点ごとに、一文ずつ読み手を代えて音読する方法はよく行われている。

そこに、間違えたら読む権利がなくなるという条件を取り入れ、正しく読もうとする意欲を高める。また、読み間違いを注意するため聞く力も付けることができる。

### 〈進め方〉

①教室の四隅の席の子どもがジャンケンをして、音読の順番を決める。

②全員が起立して、一人ずつ順番に一文ずつ読んでいく。

③文章の最後まで読み終えたら、立ち続けている子に拍手を送る。

### 〈ルール〉

- ・一文ごとに次の読み手に代わる。
- ・読み間違えたら「アウト」、着席し、読む権利がなくなる。
- ・次の読み手が、その一文をはじめから読み直す。

・読み方が分からなくて、制限時間（五秒程度）がきたら、「タイムオーバー」、着席して、読む権利がなくなる。

・次の読み手が、その一文をはじめから読み直す。

・最後の子まで回ったらはじめの子に戻る。

※権利復活を初めの方に入れてもいい。最初の方で読む権利がなくなった子は、集中力が低下し、やる気がなくなる。だから、最後の子まで読んだら、権利がなくなった子を復活させるくじをする。出席番号が書かれた割りばしを引き、数名、権利を復活させる。この時、読みの苦手な子の割り箸を教師が意図的に引き、全体の前で読む経験を増やしてもいい。

### （ポイント）

・文章は長めのものがよい。三〜四回全員に回る程度のもものが望ましい。

・どちらかと言うと、説明的な文章に向いている。物語で行うときは、会話文の中にある句点の扱いを明確にしておくようにする。（社会の教科書でページを決めてすると、よく読むので、テスト勉強にもなる。）

・同じ文章を何度も扱う。そうすることで次の時間までの音読練習につながる。

・新聞記事を教材化するなど、難読語や未習の漢字が混ざっている方が盛り上がる。

「一人しか残らなかった」とか「全員が間違い、全員復活」などという状況になると、意欲も高まる。

### つなぎ読み

四、五人の班で長文を一人ずつ音読していく。

読み間違えたり、つかえたりしたら、次の読み手に交代して読み続けていく。同様に、読み手を代えて、班全員でどこまで読めるかを挑戦していく。

### （進め方）

①国語の毎時間、班ごとに五〜十分程度、

音読の練習をする。（二時間ずつ、合計で二〜三時間を固めてもいい。）

この時、練習の進め方が良い班や班全員が気持ちよく読んでいる班を紹介し、広めていく。

※休み時間、給食時間、放課後など練習をしてもいいことを伝えておく。そういう班があれば、クラスで紹介したり、学級

通信にも載せ、家庭にも連絡する。

②「つなぎ読み」大会を開く。

1、くじで順番を決める。

2、一番のグループから前に出て、つなぎ読みをする。

・最後の人まで読み終えたら、どこまで読めたかをその班の記録とする。

・読み手を余して文章を読み終えたときは、はじめからもう一度読む。

### （ポイント）

「つなぎ読み」は、班内での音読練習が活動の中心になる。練習の過程で、だれがどんな読み間違いをしがちか、だんだんと子どもたちに見えてくる。そこで、班内でのアドバイスの言葉が出てくる。そのアドバイスを受けて、個人練習にもつながっていく。すると、互いの練習の成果もとらえやすくなり、一人ひとりが音読の練習をせざる得ない状況が生まれる。

「つなぎ読み大会」の結果として表れない班も出てくる。その時は、練習を始めた時の音読と比べさせたり、大会に向けて練習してきた過程の振り返りをさせ、結果よりも過程の頑張りを称賛する。